

## 「教師力を高める校内研修

### —教職員相互が語り合う協働的な学びの場の構築—

綾川町立綾上中学校  
指導教諭 川田 英之

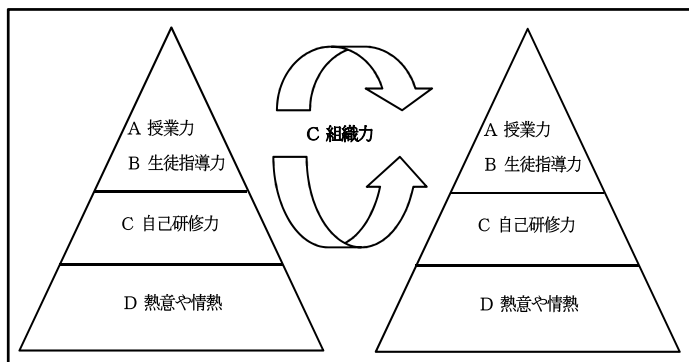
#### 1 はじめに

団塊の世代の大量退職による大量採用に伴い、急激に教職員が若返り、年齢構成がバランスを欠いている現場では、学校内での研修が効果的に行われていない現状がある。数年後には若年層の教員が学校の大半を占める学校も増え、研修体制そのものが維持できないことも危惧される。本校も同様の教職員の年齢構成の中、新しい研修組織の構築と実践が求められ、現職教育主任として上記のテーマのもと、「教職員相互の語り合い」を核に実践に取り組んだ。

#### 2 実践の内容・方法

##### (1) 教師力ピラミッド

筆者は教師力を「A授業力」「B生徒指導力」「C自己研修力」「D熱意や情熱」「E組織力」の五つと捉える。A、Bは学校生活の大部分の時間を占め、相関するものである。A、Bを支えるのがC、Dである。熱意や情熱が増し、裾野が広がることで、自己研修力が増し、授業力や生徒指導力も高まる。さらに教員間のEによる相互作用が個の教師力を高める。かつては校内の研修組織の中でこの好循環が自然になされ、若年教員が授業や生徒指導でつまずいても、組織力により、技能を高め自己研修力が増し、熱意や情熱を取り戻せていた。しかし、この組織力が弱まっているがゆえに、授業や生徒指導でのつまずきが自己研修力を減退させ、熱意や情熱も失い、失望して休職、離職していく教職員が増えてきている事実もある。そこで、教師力を高めることを主眼において、校内研修を組織し、運営した。



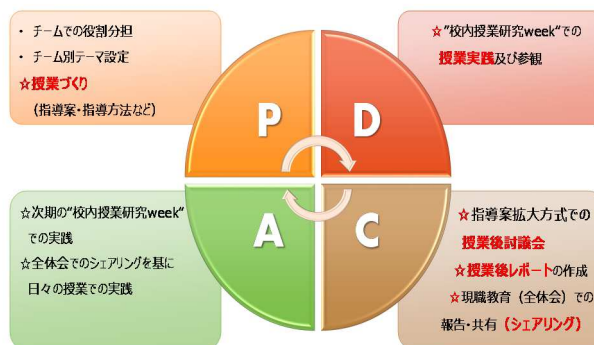
【教師力ピラミッド（筆者作成）】

##### (2) 教師力を高める組織づくり

教師力を高める組織づくりとして、教職員の経験年数を考慮し、異教科のベテラン、中堅、若年の3人のチーム構成を原則とした五つのチームを作り、年間3回の校内授業研究（全教職員が1回以上公開授業を行う）と年12回の全体研修の場を設け、PDCAサイクルで授業研究を進めた。次期学習指導要領では「主体的・対話的で深い学び」の実践が目指されているが、そのためにもまず、教師集団が「主体的・対話的」な組織であらねばならない。そこで、教職員同士が語り合い、「全員で一つの授業を創る」意識のもと、全教職員で協働しながら授業改善を目指していくこととした。

(3) 研究テーマ

学校全体の研究テーマを「学ぶ習慣を創り出す学校文化の創造～居場所感と夢中を保障する対話の深まる授業づくり～」とし、生徒が居場所感を感じ、夢中になる姿を目指し、実際の生徒の姿から協働的に語り合うこととした。



【PDCA サイクルによる授業研究】

(4) 主な取り組みの実際

① 学校の学びの実態の共有化、取り組みの共通化

全国学力・学習状況調査、県学習状況調査、校内アンケートの結果から、生徒の現在の学びのあり方とその課題、今後の取組の方向性等を語り合い、共通理解する。



【学びのあり方を語り合う】



【学校の学びのあり方戦略マップ】

② 研究授業事前授業検討会

授業者が「こんな授業を創りたい。こんな生徒の姿でありたい」という願いを語り、チームの教職員で語り合いながら一つの授業を練り上げていく。



【事前授業検討会】

③ 研究授業参観

研究授業では、生徒個々の姿に着目し、生徒が何を語り、そこで何が生まれたのか、学びの深まりはあったのかについて「看取りシート」で生徒の学びのあり様を観察する。



【研究授業参観】

④ 授業後検討会による振り返り

拡大指導案方式で、チームで、個々の生徒の姿から授業を検討し、語り合う。

⑤ 授業後交流会によるシェアリング

全教職員が、各チームの授業について相互に情報交換し、できたこと、できなかったこと、新しい発見、共通の課題、今後の取り組みの方向性等について語り合う。

⑥ 授業後レポート

実際に授業を終えた教職員が授業づくりの過程を振り返り、レポートを書く。この振り返りをさらに全体研修で共有する。

【様式3】		(1)年(1)組(技術・家庭)科 授業記録用紙									
		授業者( ) 記録者( )									
学習課題		立体も正確に表現するには、どの様に描けばよいか。									
出席生徒( )		生徒はどの様に行動した？									
●活動時間の足跡		記:30									
時間(分)		5	10	15	20	25	30	35	40	45	50
教師の姿	ワークシートを配り、立体的な表現方法を説明する。課題を提示し、生徒が描く様子を観察する。										
個で考える	描く様子を観察する。										
集団で考える	描く様子を観察する。										
まとめ	描く様子を観察する。										

【生徒の看取りシート】

- 教師が楽しいと思って準備した教材は生徒にも楽しさが伝わる。6校時であったにもかかわらず、生徒は真剣に取り組み、絵の違いに気づき感じ取ってくれたと思う。生徒側からさらに深く追究しようとする授業が展開できるようにしなければと感じた。
- 生徒が主体的に学習に参加するためには、学習課題の設定が重要だと改めて感じることができた。普段の授業ではあまり意欲的ではない生徒も、進んで発表をしたり、楽しそうにグループ活動をしたりしている姿をみて、話したくなる、夢中になるとはこういうことなのだ、と感じた。

(授業後レポートより一部抜粋)



【授業後検討会】



【授業後交流会】



### ⑦ 若年研修

若年研修では若年教員がベテラン教員の語りを聴く場を設けている。「授業について」「学級経営について」「教師として心がけていること」など、毎回テーマは様々だが、若年教員が、語り合いの中で何かを感じ、教員としての資質の向上になることを目指している。また、ベテラン教員も、自身の教師人生を語り直すことで、新たに教員としての意欲の向上につながると考えている。



【若年研修】

## 3 実践の成果

### (1) 授業づくりへの意欲と見識の向上

全教職員が、授業づくりへの意欲と見識を高めている。授業者として教壇に立つときも、同僚の研究授業を観察するときも、丁寧に生徒の姿を看取り、「夢中で」語る姿から、生徒の成長や自身の成長に喜びを見出すようになってきていることが伺える。研修サイクルを重ねるにつれて、自分のチーム以外の授業や討議会にも、積極的に参加する教職員が増えてきている。



【意欲的な研究授業への参加】

### (2) 教師力の向上

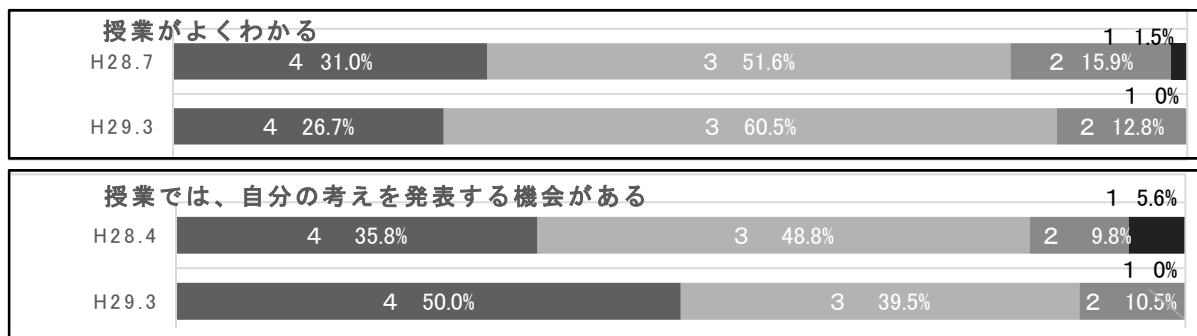
レポートや語り合いの言動からは、若年教員もベテラン教員も、単に「授業力」だけでなく、「生徒指導力」「自己研修力」「熱意や情熱」を、語り合いの中で暗黙知の内に学んでいることが伺える。組織力が、総合的な教師としての資質を向上させ、生涯学び、成長し続ける教師力の土台を築いている。

○ これまでの取り組みの成果が表れたのがうれしかった。今後も、生徒が興味をもって取り組む教材開発を行いたい。またチームの他教科の先生方の意見は、専門性にとらわれて、生徒の目線を見失いがちな自分にとって、大変貴重なものであり、ありがたかった。

(ベテラン教員授業後レポートより一部抜粋)

### (3) 生徒の学びの姿の変化

全国学力・学習状況調査、県学習状況調査等で、学びの有り様に肯定的な回答をする生徒が増え、高い数値を示すようになった。また、生徒アンケートでも、学びに肯定的な回答をする生徒が増えてきている。教師が語り合うことで対話の価値を自ら実感し、それが授業における生徒同士の学びの姿に好影響として波及している成果であろう。



【生徒アンケート変容の例】

## 4 課題及び今後の取組の方向

現在「継承」ということが盛んに言われている。一般には「ベテラン教員が培ってきた知識や技能を、若年教員に教える」と理解されている。それは大切なことではあるが、一方で教師力は、その時々状況や文脈に依存するため、一般化して論じることが困難な面もある。ある状況でうまくいった指導が、別の場面でうまくいくとは限らない。よって、一方的、効率的な知識の伝達では、真の「継承」とはならない。

例えば、研修で次のような場面があった。理科でベテラン教員が研究授業をした際に、実験中、あるグループのガスバーナーの色が突然オレンジ色に変化した。生徒たちは、なぜこうなったのかの原因を真剣に語り合っていた。これは、授業の課題とは直接関係がなく、ベテラン教員はすぐ本来の実験に戻させた。しかし、参観していた若年教員が授業後検討会で「この場面こそ本当に面白かった」と素直な感想を述べ、ベテラン教員は「教師に与えられた実験をただこなすだけでなく、これこそ本来の理科の学びの姿なのではないか」と気づき、自身の授業観を語り直したのである。

この事例のように、ベテラン教師が一方的に教え、若年教員が無条件に受け入れるという形ではなく、同僚性で相互に語り合う中で感じ取ることで生まれてくるもの、相互に学び合う力が教師力として重要なのである。そして、これこそが本来の「継承」として考える。

教職員が語り合い、学び合う姿勢を大切に、今後も組織の活性化と研修の充実に努めていきたい。